

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第84号 2021年12月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 今、戦争をどう教えるか	猪股 大輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史(84) —百貨店(デパート)と歌劇(オペラ)・軽演劇の出現—	神辺 靖光	7
大東文化大学4年生の就職活動体験談(1978年度)から —手記・私はこうして就職の海を泳ぎきった—	谷本 宗生	13
学校資料の教材化を模索して⑦ —教員を対象にした聞き取り調査を事例に—	八田 友和	17
明治後期に興った女子の専門学校(39) 東京音楽学校の異才——三浦環	長本 裕子	21
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 (9):鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科(9)	吉野 剛弘	25
史料紹介 松本深志高校における教育課程の実験的研究(19 57年)その5	富岡 勝	30
体験的文献紹介(32) —学会発表の開始と1970年代の教育史学界—	神辺 靖光	35
刊行要項(2015年6月15日現在)		40
短評・文献紹介		41
会員消息		42

コラム

今、戦争をどう教えるか

いのまた だいき
猪股 大輝

(東京大学大学院)

1. はじめに

今年度、縁あって都内の高校で1年生に向けて必修の世界史を教えている。週に2回、近現代史を中心に自由にやってくれ、とのことであった。教員免許はとった

ものの、人に教えるという経験をろくに持たなかった私にとって初めてのことの連続であり、悩むことも多かった。その中で、特に困ったのは近代史の帰結としての第二次世界大戦の扱いである。文理選択以前の必修として、生徒によっては学校教育で受ける最後の歴史の授業となるこの科目で、どのようなことを生徒に伝え、共に考えていくべきなのか。また、コロナ禍において、過去考えられもしなかったような非日常が日常化し、個々人の行動が抑制されることが常となった今日において、戦争を考えるということはどのような意味を持つのか。12月をもって戦争までの範囲を一通り終えたこともあり、拙いながら記録しておきたい。

2. 戦争を教える

私が担当する科目は、学年全員が受ける必修科目である。先述の通り近現代史を扱ってくれ、とのことであったが、例年、19世紀末の帝国主義的膨張政策から話を始める、と聞き、これを踏襲した。ただ、帝国主義を教えるためには最低限、産業革命による社会経済的な変化について扱う必要があると考えこの部分から話を起こした。授業はその後、帝国主義政策の具体的展開をたどりつつ、特に清朝末期にフォーカスし、帝国主義がもたらした様々な政治的变化を検討した。次いで第一次世界大戦、1920年代、第二次世界大戦と授業を展開した。

授業では、NHKが90年代に放映したドキュメンタリー番組「映像の

世紀」のデジタルリマスター版の各回を導入として見せることで、具体的なイメージを掴ませることを試みた。また、単語を覚え込ませるよりは、歴史の流れや当時の人々の考え方を想像させることを目指し、日記や証言録などを繰り返し配布した。更に「映像の世紀」や各定期考査のたびに生徒に感想や考えを書いてもらい、それらをより深めたり、現代の問題と結びつけて考えられるような論点を提起することを心がけた。こうした一連の実践の中で生徒の反応や記述からいくつもの発見があり、それらを受けて授業を再構成するきっかけとすることもあった。それらの中から2,3気になった点を整理したい。

まず、授業全体の構成を決定した生徒の戦争観について。生徒たちの感想を読むと、彼/彼女らは基本的に、戦争は愚かで悲惨であり、益のないもの、そして繰り返してはならないものだ、という認識をすでに持っている、ということが分かった。戦後日本においてしばしば見られたような歴史修正主義的な論理を用い、戦争を肯定しようとする議論はほとんど見られなかった。こうした生徒たちに対して、再び戦争はいけないものだ、と繰り返すだけの授業にはあまり意味はないのではないかと。このように考えつつ、更に生徒の反応を探ってみると、生徒は戦争を否定するのみならず、それを「理解不能」と捉えていることに気付かされた。生徒は、笑顔で第一次世界大戦へ出征していく兵士の映像に対して「理解できない」と口々に感想を書いてよこしたのであった。

よくよく思い返してみれば、私も生まれてこの方、明確な戦争の雰囲気の中で生きたことはない。生まれたときにはすでに冷戦は終わっていたし、9.11の記憶はおぼろげだ。イラク戦争も小学校に入ったか入っていないかの出来事である。だから教える私自身も結局戦争はよくわからない。祖父母も戦時中はまだまだ小さく、まとまった戦争体験を聞くことも出来ない。こうした中、しかし単に「理解不能」なままではいけないのではないか、ありのまま理解することは無論不可能であっても、

戦争に向かっていく当時の状況について可能な限りの歴史的想像力を持つことが必要なのではないか。このように考え『君はヒトラーを見たか』、『ある憲兵の記録』、『戦中派虫けら日記』などの抜き刷りを配り、戦争に向かっていった人たちの境遇をなんとか想像させるような授業を展開することとした。授業では、「理解できない」と思考を止めてしまいがちな生徒の思考に先回りし、「あなたが今同じ立場だったら」と何度も問いかけ、想像し続けることを要求した。生徒に無理難題とも取れる発問を繰り返しながら、自身も常に問い返される日々だった。

2つ目に、生徒の反応の中で、国家や国民に対する見方はとりわけ興味深く、また、授業の上で苦慮した点であった。授業の中で生徒たちは戦争へ向かっていった経済的背景についてはすんなり共感を示すものの、国家への忠誠や国民としての自意識などはほとんど理解を示さず、人びとが戦争に向かっていく上で自明のものとして自ら納得させた論理がいつまでもしっくりこないようだった。これらの認識をどう説明すればよいのか。近代学校制度の確立や総力戦、大衆社会論などにも触れつつ内容を構成したが、残念ながら明確な手応えはなかった。

この部分については、私自身と生徒の間のおよそ10歳の年の差を意識する出来事でもあった。周知の通り、特に2000年代に入って以降、世論の「右傾化」が叫ばれ、書店などのいわゆる「嫌韓本」が問題となった。ネット世代を中心とした「ネット右翼」/「ネトウヨ」という単語も広まり、従軍慰安婦や徴用工などの戦争責任をめぐる問題が東アジア各国のナショナリズムを刺激した。私自身、こうした「ブーム」の最中に中高生時代を過ごし、インターネットに入り浸る中でナショナリズムの物語を多分に摂取した経験がある。しかし、2010年代を通して若干議論の転換を感じることも看過できない。確かに今日でも戦争責任をめぐる国際的論争は止んでいない。だが、日本のナショナリズムを誇大、かつ積極的に強調するような言説は若者世代やインターネット文化が

らはめっきり退潮してはいないか。経済的衰退が明らかであり、少子高齢化も進む日本の現状、あるいは自己犠牲、モーレツ文化、パターンリズムでやってきた日本社会の伝統をもはや誇ることは出来ない。生徒たちにナショナリズムがないわけではない。しかし、1920年代のジャズエイジに湧くアメリカの映像に対して「今後、日本に好況は来るのだろうか」とか「日本はもう一度輝けますか？」などと感想を書く生徒たちからは、現在の社会経済的状況に対するある種の諦めを感じ取ることができる。彼/彼女らにとって、歴史的に「国民」を賦活したようなナショナリズムの物語は、もはや空虚にしか響かないのではないか。こうした地点に立って生徒の想像力を刺激しながら「戦争」を教えるためには、どのような工夫が必要なのか、未だ課題として残る。

第三に、以上のような国民をめぐる物語について上手く説明できない一方で、戦争前の様々な思想と今日的状況との関係について考えるように求めると、相当の反応を得られることも興味深かった。これはコロナ禍の時代状況とも関連しているのだろう。非日常が日常化し、様々な旧来の生活の様式が抑圧され、変化を求められる中で、しかしながら日々、なんとなく生きられてしまうという事態を経験したことは、戦時下の人びとの考え方を想像してみる上で間違いなく助けになって(しま)っているようだった。

また、より豊かな反応を得られる事例もあった。例えば、授業では、優生思想についてナチスの政策に悪用されたことで知られるヒンディングとホッヘ『生きるに値しない命を終わらせる行為の解禁』を元に説明した。更に、現代でも相模原の障害者支援施設での殺人事件を典型として、安楽死や出生前診断、新型コロナウイルス対応など様々な場面で似たロジックが見られることを指摘した。「戦争は繰り返してはならないものだ」と書くばかりで思考を止めることも多い生徒たちにとって、このように当時のロジックが今日にも続いている、という説明は、

コロナ禍の時勢も手伝って特に衝撃的であるようだった。定期考査後の感想では、この部分についての言及がしばしば見られた。

3. おわりに

蘭信三のまとめに従えば、今日は「ポスト戦争体験の時代」である。戦前・戦中世代人口が急速に減少する中で、「戦争体験者から直接その体験を語ってもらい反戦平和の思いを継承する」ような「戦後日本社会において反戦平和運動の中核にあった」活動もいよいよ困難になりつつある。また、「戦後の日本社会の原点」に「敗戦体験」を据える、という考え方も当然変質しつつある（蘭信三他編『なぜ戦争体験を継承するのか』みずき書林、2021年、13,19頁）。こうした中で、戦争を継承することの意味、方法、内容に至るまで広範な問い直しが進んでいる。自らの授業もまた、以上のような問い直しに直面し、なぜ第二次世界大戦をこれほど重視するのか、という問いを常に考えざるを得ない中で探り探り進められるものであった。

実践はこれまでも書いてきたように、教師と生徒双方が、もはや分かり得ないものである戦争について想像し、また、特にコロナ禍の中で変質した現在の社会を捉え返すことを重視しつつ進められた。個別には書ききれないクラスごと、生徒ごとの反応の違いも当然あり、また執筆者自身の経験の不足もあり、以上のような歴史学習がどれほど上手くいったか判断することはできない。明らかに生徒の関心が高く、上手くいったと思える回（例えば全体主義と優生思想について扱った回）もあれば、上手く手応えを感じることができなかった回（例えば、明治30年代における近代国家日本の誕生を扱った回）もある。様々な反省もあるが、今日の教室の一風景ということで報告した次第である。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(84)

—百貨店(デパート)と歌劇(オペラ)・軽演劇の出現—

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

フランスのボン・マルシェを嚆矢として19世紀後半、欧米諸国にデパートメントストア(百貨店)が出現した。日本では明治37年、三越呉服店が呉服専門から服飾に関するあらゆる商品(百貨)を扱うと新聞紙上に宣言してから松坂屋、松屋、高島屋、大丸などの大手呉服店が相ついで百貨店化していった。大正期になると東京、大阪に次いで地方都市にもデパートの波が広がった。いずれも目貫き通りに壮麗な洋風店舗を造り高級感を演出しながら(例えば美しいショウウインド)旧来の座売りから陳列販売へ転換したのである。店



三越開店の広告

に入るのに靴を脱がずにすむ。中産階級の主流をなすサラリーマンにとって、これは便利である。はじめ自分一人で入ったデパートも休みには妻や子どもを連れての来店になり、デパートの方もそれを当て込んで食堂を設けたり日用品や雑貨まで売るようになり、さらに新式の玩具おもちゃや人形などを陳列したり屋上を遊園地にしたりして家族ぐるみの娯楽場にしてしまった。旧東京市内の中産階級は勿論、郊外住宅の住民も電車を乗り継いで休日には家族ぐるみでデパートに出かけ、買い物を楽しみ、昼食をとり、屋上遊園場で子どもを遊ばせ、時にはデパートの催しものを楽しんで帰宅するというのが風物詩になったのである。

大阪もデパートをつくっていたが、昭和4年4月、阪急電鉄が大阪梅田駅に隣接してつくった阪急百貨店は異色である。地上八階、地下二階の百貨店はそれまで梅田駅に隣接していた阪急マーケットを大改装したものだ。ターミナルデパートという全く新しい構想でつくられた。着想者は阪急電鉄の社長・小林一三である。



小林 一三

小林はすでに競争相手の阪神電鉄を圧倒し沿線に田園都市をつくって乗客を確保していた。田園都市住人の大半は大阪へ通勤するサラリーマンである。中流意識の強い彼らの買物は大阪の百貨店をめざすだろう。東京の場合と同じく、大阪でも三越、大丸等のデパートができていたが、これらはみな旧呉服屋から変ったもので、都心に寄りそっていた。阪急電鉄の沿線、田園都市の住民に便利な幸せを提供したいと考えてつくったのがターミナルデパート阪急百貨店である。都心の百貨店には行かせない。阪急電鉄の終着駅梅田にたつこの百貨店で乗客の足を止めてしまう。そのために小林は工夫した。呉服屋出身のデパートと違って小林は日用雑貨品や食料品の売り場を充実させ、各種の食堂を設けた。中でも異色は最上階にある洋食堂である。設^{しつら}えは豪華で眺望もよいがメニューは多様である。低廉なものもある。有名なものにソースライスがあった。白米に備え付けのソースをかけて食べるのだが、福神漬が添えてあるからこれで食べてもよい。中流の田園都市の住人でも懐^{ふとこ}が寂しい時もあるだろう。大阪市民が来たってかまわない。都市中流家庭の人々の心を汲んでの作戦であった。諸事、見栄張^{みえば}りの東京市

民相手ではこの作戦はできないだろう。この作戦は大当たりとなって阪急デパートのソースライスは広く巷間に伝えられた。

人間に娯楽は必要である。仕事に追いたてられる都会人には特に必要である。束の間の一刻を楽しめるのは演劇芸能に外ならない。伝統的な能狂言や歌舞伎、人形浄瑠璃じょうるりは明治になっても続き、特に勇壮な江戸歌舞伎は荒事あらかごととして東京歌舞伎の芸となり、情緒纏綿てんめんの和事わごとを得意とする上方歌舞伎は大阪を本拠とした。ともに明治大正に引き継がれている。しかし大正時代の新中産階級サラリーマンは歌舞伎だけでは飽き足りない。もっと斬新な舞台を求める。彼らは西洋風の歌劇(オペラ)を求めた。すでに明治44年、東京に帝国劇場ができた。濠をへだてて宮城前広場に向い合う東京の一等地である。建築様式はパリオペラ座を真似したネオ・バロック式で内部は宮殿のように飾り立てた。新式百貨店に変身した三越は早速“今日は帝劇、明日は三越”のキャッチフレーズで宣伝した。帝国劇場は早速、歌劇部を附設し、イタリー人・ローシーを招いて特訓を開始した。だが即席にオペラは上演できなかったのが帝劇歌劇部は大正5年解散、ローシーは残党を率いて赤坂のローヤル館で奮闘したが、これも赤字つづき解散した。しかしここで養われた若き歌手たちが、浅草に移って浅草オペラを創り出すのである。

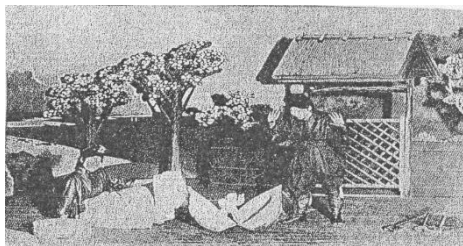
浅草は浅草観音の門前町として江戸時代から庶民の遊び場であったが、明治17年、浅草の第六区に興行小屋が集められ、寄席、待合まちあいなどが連なった。ここに赤坂ローヤル館の残党・田谷力三、清水金太郎、藤原義江、原信子らが集って大正6年、浅草オペラを立



大正7年オペラ「天国と地獄」
浅草日本館

ち上げたのである。演目はローシー流のヨーロッパ正統のオペラではない。「ボッカチオ」「天国と地獄」のような軽い喜歌劇・オペレッタであった。これは浅草の大衆から忽ちうけて大盛況となった。その熱狂的な観客はペラゴロ（オペラゴロツキ）と善良な？市民から蔑まれたが、昭和になって忽然と現れた榎本健一（エノケン）率いるカジノフォリーのレヴェーつき喜歌劇オペレッタへ影響を与えたと思う。浅草オペラは関東大震災でなくなった。本格的オペラが帝国劇場でおこなわれたのは第二次大戦後、藤原（義江）歌劇団が結成されてからである。

関西では早くも大正3（1914）年に宝塚少女歌劇が始った。企画者は阪急電鉄社長の小林一三である。前年、阪急の前身、箕面有馬電鉄が開通した時、小林は沿線住民の娯楽施設として武庫川沿いに動物園と宝塚温泉を開きそこに室内プールを設けた。しかしこのプールは



大正3年4月
宝塚少女歌劇第1回公演
「ドンブラコ」

低温で失敗した。小林はプールの水を抜いてその跡に劇場をつくり、アトラクションを開始した。その年のうちに少女歌劇養成所と宝塚少女歌劇団がつくられた。当時、東京・大阪のデパートで客寄せのため少年音楽隊や少女唱歌隊ができていたのにヒントを得たのかも知れない。大正3年第一回公演は「歌劇ドンブラコ」で桃太郎の鬼退治というたわいない筋であったが音楽と舞台装置、踊りは近代洋風の華麗なものであった。同年12月8日の「大阪毎日新聞」は「家庭の男女老幼膝を交えて観覧しても豪も他の演芸の如く顔を赤らむるが如き場合なきを信ず」と絶賛した。“顔を赤らむる”とは歌舞伎やその芸の垂流新派劇の濡れ事（男女の情事の演出）を指している。これは小林一三の演劇観を言い当てている。小林は歌舞伎・新派の画く世界が

大嫌いで、新中間層、インテリ層はこれらから脱却し、西洋風オペラや音楽、舞踊に向うと信じていたのである。宝塚少女歌劇は大当たりをとって阪急沿線の田園都市住民のみならず関西中間層インテリたちの支持を得、まさに家族ぐるみで楽しめる舞台芸術になってゆく。小林のねらい通り、主催者と観客が一緒になって新しい娯楽、芸術をつくり出す風潮が起ったのである。これを受けて宝塚はフランスのシャンソン、レヴィウ等を取り入れ、これを日本化して発展してゆく。やがて東京にも進出して東京宝塚劇場をつくり有楽町娯楽地帯をつくり、松竹映画に対抗する東宝映画をつくるようになるのである。

このように新しい新中間層の娯楽ができたとはいえ、大都会の享樂はこれでおさまるものではない。庶民大衆の遊び場として東京に浅草があったように大阪には千日前があった。大阪みなみの歓樂街・千日前は江戸時代、獄門場や火葬場があった所だが、明治の半ばにはろくろ首や猿芝居などがあってその淫猥グロテスクな演物に大衆の人氣があった。近くには色街もある。ここの裏に明治45年、吉本吉兵衛と妻せいが古ぼけた演芸場をはじめた。これが大正時代



吉本吉兵衛



吉本せい



明治45年4月、吉本吉兵衛が最初に借りた芝居小屋・文芸館

に隆盛し今日に続く吉本興行である。はじめは噺家^{はなしか}数人と曲芸^{きだゆう}義太夫、講談などいわゆる“色物^{いろもの}”であったが後にエンタツ、アチャコという天才芸人が加わりしゃべくり漫才^{まんざい}という新しいジャンルを開拓して日本中を席卷^{せっけん}した。

都会人の娯楽は舞台芸術を鑑賞したり演芸場で笑ったり、旧来の遊郭に通ったりすることばかりではない。大正期にはダンスホールでダンサーと踊る。カフェで女給と親しむ等新しい社交娯楽もはじまった。しかしきりがないのでこれらは必要に応じて述べることにする。

参考文献

鈴木博之『都市へ』（『日本の近代10』）

講談社『日録20世紀』スペシャル5、『日録20世紀』大正元年

国際文化情報社『画報近代百年史第10集』

大東文化大学4年生の就職活動体験談(1978年度)から

— 手記・私はこうして就職の海を泳ぎきった —

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

1978(昭和53)年6月、大東文化大学では、3年次生(2000名)を対象にして、就職のための適性進路診断検査を実施した。前年に引き続いての、2回目の試みであったとされる。同年12月には、その検査結果を学生に返却するにあたり、検査結果の解説・講評として、心理学を担当する矢田部順吉助教授が、「正しい進路選択のために」と題し、社会人としての就職をこれから本格的に目指していく学生らに丁寧な説明を行ったという。

同時期に、4年生が1978年度の就職活動体験談を手記(私はこうして就職の海を泳ぎきった)として、以下のように後輩らに向けて公表している。なかでも興味深い数名の手記を、ここでは紹介しておきたい。

*** **

ケースI まず会社情報を 英米文学科・前川千恵子(昭文社)

具体的な志望先を決定するにはいろいろな迷いが生じてくると思うのですが、やはり、できるだけ早めに決めておくことです。不況の折、採用見送りということもなきにしもあらずですから、その社の状況を早くキャッチすることです。特に女子を採用する会社は決して多いとはいえませんから。

…放送界では「説明会」などはありませんから、自分で情報を集めなければならぬのが実情でしょう。筆記試験の内容はかなりハイレベルです。やはり時事問題は必須であり、広範囲の常識が知識として正確に整理されていなければ充分とはいえないと思います。面接が重視されるのは当然ですが、その前の筆記試験をパスするのが先決であるというのが私の実感です。

会社訪問開始から内定までの一カ月間それは複雑な心境です。とにかく一喜一憂の毎日でした。私の場合、試験日が四日連続してしまい、それもその内の一

社が地方での現地試験であったので、時刻表とにらめっことなり、肉体的にもかなりハードスケジュールでした。さらに、この時期は卒論の追い込みでもあり、どこかでそれが脳裏をかすめジレンマに陥ってしまったことも事実です。そんな時は仲の良い友だちとよくしゃべり、よく食べるのに限ります。そして、同じ業界を目指している友人と電話で情報を交換し合ったことも、私にとってはプラスだったようです。

「就職活動」とはやはり辛いものです。でも、自分の一生が左右されるのですから、より早く自分の適性を知り、情報をキャッチし、勉強を始めることが切望されます。どの企業も「より良い人材」を求めていることは紛れもない事実です。相手は本当の“あなた”を見つめるはずです。就職とは一種の恋愛である、と言えるかもしれません。

*** **

ケース2 さわやかな印象を 中国語学科・長沢岳秋(丸大食品)

九月二十九日、私が入社内定をした丸大食品の門をたたいた日である。六月の就職部によるガイダンスの時点でこの会社と決めていたのである。友人・先輩、マスコミなどから刺激され、明日こそは、明日こそはと思っているうちに夏の休暇が終り、十月一日の解禁日が目の前に近づいていた。休み中に就職課を訪れたが、学生の影がないのに安心して時が過ぎてしまったのを悔んだ。学部別の相談日に就職課を訪れて紹介を受け、心臓が口から出る程の思いで会社へ電話を入れて訪問日を決めた。

さすがに最初の日は足がすくんだ。…やはり、きちんと会社の内容を研究整理して臨むべきで、質問事項も用意してゆくべきであろう。しかし、めだちたいという気持ちにまかせて、少し考えればわかりそうなことは発言しない方が良いだろう。会社訪問の重要性は、会社の内容をできる限り知ること、自らを売り込むことにあるが、不自然な態度はすべきではない。

…その後は就職課の先生の紹介もいただいていたので、話はトントン拍子にすすんで、会社からの電話連絡を待った。重役面接はいやだった。一世一代の緊

張という感であった。ここでもやはり要旨を簡潔に、はっきりと述べた方が感じがよいし、はつらつとし、さわやかな印象を与える。少々の失敗など吹っこんでしまう。面接も済み試験の通知を受け取った時、内々定だったようである。

…友人との情報交換も忘れてはならないし、そのつどの就職課への報告も怠ってはならないことの一つである。企業からも学校へ報告があるので、その手ごたえをはっきりとしたものにすることができる。大東文化大学の誰々と言って行く以上、看板を背負っているようなものであるから、就職課との接触は綿密にすべきである。報告に行くたびに、就職課の先生の言葉で不安が取り除かれたものである。

…自分に合った、自分の力が発揮できる企業・業種を選択するべきで、その会社に入社して自分は何をするのか、社会人としての最初の就職であるから失敗のないよう検討して欲しい。積極的にやる気のある人間、若々しく、はつらつと、さわやかな人間には、いずれの企業も門戸を開放してくれているのではないだろうか。

*** **

ケース3 早めに勉強切上げ 経済学科・小林芳彦(国税専門官)

国税専門官試験を知ったのは三年生の七月。国家財政を担う「税務」という仕事の重要性、仕事を通じて専門知識を身につけ、税務のスペシャリスト、職業会計人にもなれる、一般行政職より待遇面で優遇されている、等の点に魅力を感じ受験を決めた。

…私はゼミの関係で日経新聞を読んでいた。これは時事問題だけでなく経済や財政学、面接などにも役に立った。公務員試験には憲法と経済学と一般知能の勉強が特に重要だと思う。憲法や経済学は専門にも教養にもかなりのウェートを占めているし、経済学は財政学や経済学史の勉強にもなる。一般知能試験は知識の有無を問うのではなく、時間があれば出来る問題がほとんどなので、問題を数多くこなして慣れ、問題のパターンを覚えることにより、かなり時間を短縮

できる。二次の面接試験は東京国税局で受けた。ある程度質問は予想できるので、その準備もしておいた方がよい。

私の勉強方法でよかったと思うのは、試験の三カ月前には勉強を終わっていたことである。といっても、厳密にはかかる流した程度で、とても終わったと言えるものではなかった。それでも一応終わったということで、試験まで落ちついて、実際の試験形式の問題集や、記述式のための復習、実際に書く勉強、各種公務員試験の情報収集が出来た。情報収集や気分転換には大学の公務員講座が役に立った。…細部は大胆に捨て、要点を押えた勉強を心がけなければならない。また出来るだけ早く勉強を始めてもらいたい。人間とは妙なもので、勉強をしているうちに、あやふやだった志望動機が明確に強いものになり勉強にも身が入るようになり、自ずと能率が上がってくるものである。…みんなが自分の望む方向に進まれることを祈ります。

*** **

熱心であった大学の就職指導の徹底ぶりが、同上の4年生らによる就活手記からもよくうかがえるであろう。当時の大東文化大学卒業生の主な就職先を、学部別にみると、文学部では伝統的に多数の学生がやはり教職につき、経済学部では金融・商社関係が顕著であり、外国語学部では教職と貿易関係企業が多く、法学部では公務員の合格者が増加していた、というのが特徴である。

学校資料の教材化を模索して⑦

—教員を対象にした聞き取り調査を事例に—

はった ともかず
八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

本ニューズレター第83号において、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス(以下、芦屋校)の教職員を対象に実施した「学校資料に関するアンケート調査」の概要と結果について整理を行った。

その集計結果を受けて、教職員を対象とした聞き取り調査を実施したため、本稿ではその概要と結果について整理・提示する。

2. 聞き取り調査の概要

ここでは、聞き取り調査の概要について整理を行う。

1. 名 称:「学校資料に関する聞き取り調査」
2. 実 施 日:2021年8月3日(火)
3. 調査対象:芦屋校の教職員7名
4. 実 施 者:筆者
5. 聞き取り調査の結果

本調査では、「学校資料が保管されている場所」「学校資料を活用した授業実践」の2つの項目に分け、整理・提示する。

(1) 学校資料が保管されている場所について

学校資料を見たことがある教員に対して、「校内のどこでみたか」について聞き取りを行った。面談室や玄関、廊下といった筆者も把握しているような場所から、講堂の倉庫の奥など、これまで確認した事のない場所に学校資料が眠っている

ことも明らかになった。ここから、一人ひとりの教員が把握しているだけで、学校として把握していない資料が多くあることが推察される。

(2) 学校資料を活用した授業実践について

活用したことのある学校資料として、「服飾」「肖像画」「戦後検定教科書」「国定期の教科書」などが挙げられた。活用資料と活用方法は下記の通りである。

(表1)

(表1) 学校資料とその活用方法について

活用資料	活用方法
服飾	新入生を対象としたオリエンテーションの際に、制服とマネキンを活用した説明を行っている。入学者説明会の時に、制服販売会社が、マネキンを使った説明を行っている。
肖像画	日本史の授業で、明治時代に活躍したお雇い外国人を取り上げた際、肖像画とともに、クラーク博士を紹介。また、生徒が胸につけているクラーク博士をモチーフにした校章(バッジ)も併せて取り上げた。
参考書・問題集	現在、学校で採用している教科書・参考書を活用したとのことであった。いずれも、今現在使用されている参考書や問題集であり、明治や大正、昭和の学校で使用されていた参考書や問題集を活用した教員は散見されなかった。
戦後検定教科書	検定教科書制度を考える話し合いや討論学習で使用しているケースがあった。学校設定科目の小論文の授業では、検定教科書制度を題材に、小論文の執筆を行っていた。

<p>国定期の教科書</p>	<p>市販されている「国定期の教科書（復刻本）」が図書室に配架されているため、その図書を活用した授業を行っていた。</p>
----------------	---

（聞き取り内容をもとに筆者作成）

学校資料を活用している場面は、授業（日本史や学校設定科目など）、新入生オリエンテーションなど多岐に渡っていた。しかし、学校資料を活用した授業実践が指導案という形で残っているケースは散見されなかった。

今後の展望としては、①芦屋校における学校資料の実態を引き続き調査すること、②学校資料を活用した授業モデルを提示すること、③開発した授業モデルを基に授業実践を行うことなどが挙げられる。

3. おわりに

本稿では、芦屋校の教職員を対象に実施した「学校資料に関する聞き取り調査」の概要と結果について整理を行った。今後、本調査で明らかになったことや活用方法の提案について、調査協力者を中心に還元していきたいと考えている。また、芦屋校は今年度で開校30周年を迎えるため、学校資料を介して、芦屋校の歴史や伝統を知り、振り返るきっかけづくりを行いたいと考えている。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、芦屋校の教職員の先生方にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

【参考文献】

・八田友和「学校資料の教材化を模索して②—教員を対象にしたアンケート調査を事例に—」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第81号

- ・村野正景・和崎光太郎(編)2019『みんなで活かせる!学校資料』京都市学校歴史博物館
- ・村野正景ほか2021「学校内歴史資料室についての調査結果と所見—全京都市立小学校を対象としたアンケート調査—」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第8号、京都市学校歴史博物館pp.3-18
- ・和崎光太郎2018「学校歴史資料の目録と分類 補遺」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第7号、京都市学校歴史博物館pp.29-34

明治後期に興った女子の専門学校(39)

東京音楽学校の異才——三浦環

ながもと ゆうこ
長本 裕子(ニューズレター同人)

東京音楽学校出身の三浦環は、オペラ『マダム・バタフライ』の「お蝶夫人」がその代名詞のようになった。大正から昭和初めにかけて世界を舞台に活躍した日本人初のオペラ歌手である。

環は明治17年2月、現在の東京都中央区で、日本初の公証人の父柴田猛甫たけとしと母登波とわの娘として誕生した。父は芸事が好きで、環に3歳のころから日本舞踊を、6歳のころから長唄と琴を習わせた。環は30年、東京女学館に入学。2年生の9月、東京音楽学校を卒業した新任の杉浦チカが“あなたは生まれながらの才能がある。上野の音楽学校に入って勉強なされば、きっと日本一流の音楽家になれます。”と勧めた。環はその時初めて音楽家になる決心をした。しかし、父は“女学校を出ればお嫁にいくもの。琴や長唄などはお嫁入りの資格として習うものだ。音楽家などは西洋の芸者じゃないか。”と許さなかった。そんな父を“環さんは音楽家としての天分を持っている。この天分をいかさないことは日本の文化の損失である。”と杉浦が説得した。父が選ぶ婿と結婚するなら許そうということになり、入学直前に陸軍軍医で12歳年上の藤井善一と内祝言を済ませた。学校の規則は未婚者でなければならなかったため、本科卒業までは柴田環で通した。

環は33年9月、満16歳で東京音楽学校に入学した。夫藤井は単身任地の天津(現中国)に赴いた。自宅の芝から上野までまだ電車がなく、環は父が購入してくれたイギリス製の赤い自転車で通った。そのころ自転車は高級品で、まして女性が自転車に乗るなどは考えられなかった。環は前髪を赤いリボンで結び、紫の矢絣の着物に海老茶の袴、靴をはいて自転車で通った。新聞が「自転車美人」と書きたてた。上野山下の三枚橋あたりには大学生が見に来るほどだった。つけぶみ付文

をする学生、恋わずらいをして死ぬ若者も出る始末。中には“女のくせに生意気だ。闇の夜に気をつけろ”という脅しの文もあった。音楽学校の男子生徒や隣の美術学校の生徒が横一列になって通せんぼし、環が精養軒のわきの溝に落ちると手をたたいて大笑いする。そんないたずらの餓鬼大将が後の作曲家山田耕^{こうさく}筈^{はげ}だった。36年『読売新聞』に連載された小杉天外の小説『魔風恋風』の冒頭、主人公の初江が赤い自転車に乗ってさっそうと登場するシーンは、この三浦環がモデルという。

環は4年間特待生であった。ピアノは当時楽壇随一の天才といわれた滝廉太郎に、声楽は初め幸田延に学び、次にヴァイオリニスト、アウグスト・ユンケルに学んだ。幸田もユンケルも声楽の専門家ではなかったため、環は発声法を自分で工夫し、声帯を無理しない方法を会得したという。これによっていつまでも美しい声で歌えるのだと自負していた。ユンケルにヴァイオリンも学んだ。環は22、3歳の長身の美青年で、「荒城の月」や「箱根八里」の懸賞曲によって名声はとどろいていた。自伝『三浦環』によると、環を非常に可愛がってくれ、環から求婚されて、すでに結婚していることを言えず困ったという。環は36年7月、本科2年生の時、東京音楽学校奏楽堂で催された日本人の手による初めてのオペラ『オルフォイス』公演で主役に抜てきされるなどすでに頭角を現していた。

37年、音楽学校本科を卒業すると研究科に進み、並行して月12円で授業補助として声楽を教えた。38年1月、婚姻届けを出し藤井環となった。夫も東京勤めとなり、家でも弟子を取り、4、50人が習いにきた。やがて夫が仙台へ転勤となった。夫は環も同行して世話女房になってくれることを望んだ。環は“自分は東京で音楽をやりたい。自分が精進して音楽を究め、西洋で認められれば、日本文化を高めることになる。”と、藤井には一人で仙台へ行ってくれるように頼んだ。藤井は“妻と芸術家の立場は両立しない。お前が、こんなに有名になるとは思わなかった。幸い子供もないから別れよう。”と理解を示してくれ、40年に離婚した。環は同年6月助教授となる。

この別れた夫の誘いで雨夜の靖国神社で会い、富士見町のお茶屋で一夕を過ごしたことが、環をつけねらっていた新聞記者に人違いされて不倫事件として報道された。これが元で、環は42年9月、足掛け3年勤めた東京音楽学校を辞任した。この環のスキヤンダルは、恩師幸田延が監督責任を問われ東京音楽学校を去る一因となる。環はこの時人違いされた遠縁の三浦政太郎（後にビタミンCを発見した医学博士）と大正2年に再婚する。

44年3月、帝国劇場が開場すると、歌劇部のプリマドンナとして活躍するが、環の名声上がるのは、主に大正期、欧米においてである。1914（大正3）年、夫政太郎とともにドイツに留学。しかし、第一次世界大戦が勃発したため、ロンドンに移動した。そのロンドンで思わぬチャンスをつかんだ。世界的な指揮者ヘンリ・ウッド卿の教を請いに訪ねた折、後の英国首相ウィンストン・チャーチルの母親が居合わせた。その婦人の依頼で、同年10月、ロンドンのアルバート・ホールで歌うことになった。国王・女王はじめ、大臣や各国大使公使が貴賓席に並び、聴衆23,000人、オーケストラ300人、コーラス1,000人、指揮はヘンリ・ウッド卿という大舞台で、振袖に日本髪を結び、歌劇『リゴレット』の一節と日本の「さくらさくら」「ほたる」を歌い大喝采を浴びた。そして、1915（大正4）年5月、ロンドン・オペラハウスで、環はまだ聴いたことも見たこともない『蝶々夫人』を歌うことになった。“ヨーロッパ風の先入観で汚されていないからこそ独自の工夫ができる”と言われ、環は子供のころに習った日舞や長唄、琴の素養を生かして工夫を凝らした。大成功を収め、翌朝目が覚めると大芸術家となっていた。

1916（大正5）年夫とともに米国に渡った。1918（大正7）年には日本人で初めてニューヨークのメトロポリタン歌劇場に迎えられ、1930（昭和5）年まで、15年間南北アメリカを中心に『蝶々夫人』を歌い続けた。1922（大正11）年のローマ公演を観た作曲家プッチーニから“あなたは世界にたった一人しか



「お蝶夫人」に扮した三浦環（吉本光明編『三浦環』）

いない、最も理想的な蝶々さんです。”と褒められたという。環の活動は欧米を中心にエジプト、ロシアなどほぼ全世界に及び、1935（昭和10）年イタリアのパレルモで『蝶々夫人』出演2,000回を達成した。

昭和10年11月、永住を決意して帰国。国内でオペラの出演やレコーディング、『蝶々夫人』を含む独唱会を開き絶賛された。翌11年6月、東京の歌舞伎座でイタリア語による『蝶々夫人』公演に2,001回目の出演をした。太平洋戦争の激化から19年3月末、母とともに山梨県山中湖畔に疎開。終戦後、日比谷公会堂において、シューベルト作曲の『冬の旅』や『美しき水車小屋の乙女』の独唱会を開いたり、NHKの依頼で録音を行ったりした。膀胱がんを患い一人では歩けない状態だったが、弟子に支えられながら舞台に登場し最後までプリマドンナとして歌い続けた。21年5月満62歳で死亡。遺言により富士山に見える山中湖岸に近い寿徳寺の母が眠る墓に葬られた。

東京音楽学校の恩師幸田延とその妹安藤幸は、姉妹そろって芸術院会員に選ばれた。しかし20年間世界各国でオペラ歌手として活躍した環には音楽学校からも日本政府からも何の栄誉も与えられなかった。これが環の寂しさだった。米国人伴奏者のアール・フランケッティとの仲や、夫三浦政太郎急死の知らせにも、ホノルルにいた環は帰らなかったことなど、奔放で情熱的な環の行動は再三世間を騒がせた。そうしたことが原因であろうか。昭和38年、環がお蝶夫人に扮した銅像が長崎市のグラバー園に建立された。そして平成8年に建立されたプッチーニの銅像と隣り合わせに長崎港を見下ろしている。それがせめてもの慰めであろう。

参考文献

吉本光明編『三浦環』お蝶夫人

瀬戸内晴美『お蝶夫人』

『創立五十年記念』東京音楽学校

『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第一巻

木村毅『海外に活躍した明治の女性』

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書

(9) : 鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科(9)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、引き続き鳥取東高等学校より刊行されている『柏葉』に掲載された専攻科の教育課程に関する情報を検討する。今号では前号より検討に入った鳥取東高等学校専攻科に導入された大手予備校の衛星講座について、選ばれた講座の内容を対象とする。

前号で示したように、講座に関する情報は断片的である。そこで、筆者が所蔵する代々木ゼミナールと河合塾の季節講習会のパンフレットより情報を補ったものが、本論末尾の表である。

内容に入る前に、史料論的な話をすると、『柏葉』に掲載された衛星講座の情報は、かなり不正確と言わざるを得ない。学校側に残っている資料との照合が必要不可欠ということである。分かりやすい点をあげれば、講座名称が一部省略されていたり、誤記が見られたりということである。何らかの加筆修正や問題点が見つかったものは、表ではすべて斜体にプラスアルファの処理をしてある。

また、当該予備校のパンフレットでは、衛星対応となっていないと思われる講座も入っている。ただし、これについては、録画したものをビデオ教材として販売している可能性もあるので、パンフレットとの照合のみで誤りと判定することはできない。ビデオ教材を見るということは、対面授業と異なることは事実だが、衛星講座と言えるのかという問題は残る。

このような史料的な制約はあるものの、判明している情報だけでも分かることがある。以下、選ばれた講座の内容に関する特徴を述べていくことにする。

選ばれた講座には、後述するような一定の傾向がないわけでもないのだが、かなり広範に選択されている。基礎的なものがあるかと思えば、東大入試対策のものが選ばれてもいる。どのようにして講座を選択したのかは不明だが、おそらくは生徒の希望をある程度反映させたものと推察される。

広範に講座が選択されているとはいえ、センター試験対策のもの、基礎レベルのものが多い。特にセンター試験対策のものは目立って多く、理科(地学を除く)、地理はほぼ毎年選択されている。数学、世界史、政治経済もよく選択されている。一方で、英語、国語、日本史はあまり選択されていない。英語や国語は多くの生徒に関わる科目であるが、それらがあまり選択されていない。英語についてはセンター試験対策以外のものが設置されることはそれなりにあるのだが、国語はセンター試験対策以外のものも含めて4年間で3講座のみで、全般的に少ない傾向である。

それぞれの予備校における衛星講座は、代々木ゼミナールは代々木校の大教室の授業をそのまま配信し、河合塾は旧桜山校の敷地内に設置された専用スタジオから送るという違いがある。つまり、代々木ゼミナールでは、衛星講座用に何かを用意しているのではなく、通常の授業、その中でも人気講師の授業が中継されることになっている。

このような状況から考えると、奇妙な点がある。代々木ゼミナールの特徴は、オリジナル講座の多さである。代々木ゼミナールは、季節講習会に限らず、代々木ゼミナール側で教材を編集した講座と、講師が自ら教材を編集したオリジナル講座の2種類がある。「講師の代ゼミ」と称されることもあることから分かるように、オリジナル講座の多さは代々木ゼミナールの特徴でもある。鳥取東高等学校で選択されたオリジナル講座は、表中の○を付した講座である。

オリジナル講座の設置数を考えると、選択されているものは少ない。代々木ゼミナールのサテライン講座では、人気講師の授業が配信される関係上、どうしても衛星講座はオリジナル講座が多くなることを考えると、その少なさはなおのこと際立つ。夏期と冬期を比べたときに、冬期で選択されているものが少ないのも特徴である。なお、冬期直前講習になるとオリジナル講座の設置数が減るということは全くないので、あくまで鳥取東高等学校で選択されていないだけのことである。

オリジナル講座の特徴を考えると、地方の専攻科に好まれるのかという感も否めない。冬期で選択されないという実態がそれを傍証している。堅実さ重視というところであろうか。1998(平成10)年以降は、講座名称もかなり自由化されているようなので、夏期冬期の講習でしか接することのない中で、一見して内容がつかみにくい講座は選ばれにくいのかもかもしれない(パンフレットを読めば講座の概要は分かるのだが、パンフレットを見て選んでいたのかは不明である)。

また、オリジナル講座は講師の個性が売りである。その中には、派手なパフォーマンスを売りにするものもあるし、現に鳥取東高等学校で選択されたものの中にもいくつかある。このようなことを考えると、とりわけ教員には好まれない側面があるようにも思われる。実際に通っているわけではない専攻科の生徒たちに講座の選択の自由があったとしても、教員のアドバイスの影響力は小さくないだろうから、教員の志向も一定の影響を与えたのではないかも思われる。

今号では、講座の選択状況を検討したが、その講座に集まった人数を勘案しなければ、どのような講座が好まれたのかということに迫れない。次号はその点について検討する。

年・期	予備校	講座名	講師	レベル
1997 (平成9) 夏期	代ゼミ	センター試験英語(英文読解)?/(英文法・語法)?	佐藤浩美	
		センター試験物理I B	鈴木誠司	
		センター試験化学I B	亀田和久	
		センター試験生物I B	中島寛	
		センター試験日本史B	ハ柏龍紀(伊達日角?)	
		センター試験世界史B	森本哲司	
		センター試験地理B	武井明信	
		○ハイレベル英語長文読解	富田一彦	
		東大文系数学	岡本寛	
		○理系数学	雨宮章雄	
○理系数学	萩野暢也			
1997 (平成9) 冬期	河合	(センター試験対策英語)	里中哲彦	
		(センター試験対策数学)	渡辺	
		(センター試験対策国語)	石原/鈴木/秋野	
	代ゼミ	基礎完成物理(力学・熱・波動)	鈴木誠司	
		センター試験化学I B	亀田和久	
		センター試験生物I B	中島寛	
		センター試験私大マーク日本史B	伊達日角	
		センター試験私大マーク世界史B	森本哲司	
		センター試験私大マーク地理B	武井明信	
		センター試験政経	小泉祐一郎	
1998 (平成10) 夏期	河合	最頻出英文法・構文・イディオム総整理	里中哲彦	応用~ハイレベル
		(センター数学IA・II B)		
		二次・私大数学I・A・II・B	大竹真一	応用~ハイレベル
		物理(波動・電気)	宮田茂	基礎力完成
	代ゼミ	センター試験生物I B)		
		近現代世界史(テーマ頻出近現代世界史?/テーマ世界史集中講義(近現代)?)		
		近代日本史(テーマ頻出近現代日本史?/テーマ日本史集中講義(近現代)?)		
		(ベシック英語)		
		センター英語	三沼秀樹	
		○英語上級レベル養成講座A組	今井宏	ハイレベル
○(超)重要テクニク数学IA・II B	大原英紀	基礎~標準・応用		
○基礎→応用POWER UP古文	吉野敬介	基礎~標準・応用		
○夏で固める基礎化学(有機)	成田一輝	基礎~標準・応用		
センター化学I B	亀田和久			
センター地理	武井明信			
1998 (平成10) 冬期	河合	英語総合読解(難関入試)	里中哲彦	総合攻略~ハイレベル
		頻出テーマ現代世界史	青木裕司	頻出分野攻略
		頻出テーマ日本史(頻出目で見える日本文化史?)		
		(センター対策地理B(テスト?/総整理?))		
		(センター対策化学I B(テスト?))		
	代ゼミ	(センター対策生物I B(テスト?/総整理?))		
		センター試験物理I B	漆原晃	
		センター試験政治・経済	吉田一徳	
		(センター英語)		
		(センター数学)		
1999 (平成11) 夏期	河合	入試頻出物理	鈴木紹夫	
		入試頻出化学	小川裕司	
		最頻出英文法・構文・イディオム総整理	里中哲彦	応用~ハイレベル
		基礎力完成物理(波動・電気)	鈴木紹夫	基礎力完成
		基礎力完成無機化学	今枝洋一	基礎力完成
	代ゼミ	(センター試験対策生物I B)		
		頻出目で見える日本文化史	須田努	応用
		頻出目で見える世界文化史	青木裕司	応用
		センター数学(IA?/IA II B?)	IA森谷慎司/IA II B浅見尚	
		○基礎~数学III C『攻略法』	岡本寛	基礎~標準・応用
センター現代文	木村勤			
東大地理	武井明信			

年・期	予備校	講座名	講師	レベル
1999 (平成11) 冬期	河合	(センター対策数学IA・IIB) 頻出テーマ近現代日本史(世界史か) (センター試験対策地理B)		
	代ゼミ	センター試験・私大マーク世界史 センター試験物理IB センター試験生物IB	森本哲司 漆原晃 大堀求	
2000 (平成12) 夏期	河合	入試頻出英語総整理 (センター試験対策数学IA・IIB) (センター試験対策生物IB)	島原一之	標準・応用～ハイレベル
	代ゼミ	○国公立大学英語SPECIAL《記述問題の解法》 ○数学IIC解法の戦略σ60 ○源氏物語特講 センター物理IB センター化学IB	西谷昇二 西岡康夫 椎名守 漆原晃 亀田和久	標準・応用～ハイレベル 標準・応用～ハイレベル 標準・応用～ハイレベル
2000 (平成12) 冬期	河合	(センター試験対策数学IB(ママ)) 頻出テーマ現代世界史 (センター試験対策地理IB(ママ))	青木裕司	頻出分野攻略
	代ゼミ	センター試験物理IB センター試験化学IB センター試験生物IB センター試験・私大マーク世界史 センター試験政治・経済	漆原晃 亀田和久 館野直子 森本哲司 小泉祐一郎	
		下線:講座名を加筆修正したもの カッコ:衛星講座対応でないもの 太字:講座の照合ができないもの(理由は括弧書き) ○:オリジナル講座		

史料紹介

松本深志高校における教育課程の実験的研究(1957年)その5

とみおか まさる

富岡 勝(近畿大学)

はじめに

第77号・第78号・第79号・第82号につづき、新制高校における特別教育活動の位置づけを知るための史料として、長野県松本深志高等学校の『松本深志高校における教育課程の実験的研究』(1957年)を紹介する。

第79号と第82号で、生徒会についての調査結果を見てきた。本号では、その調査結果から本書を執筆した教員(残念ながら、岡田甫校長以外に執筆した教員の氏名は記載されていない)たちはどのような課題を見だし、改善方向を考えたのかを紹介していく。

生徒会についての観念的な理解

本書では、生徒会に関する調査結果に関する考察のなかで、以下のような問題点を指摘している。

調査の結果をみると、概して生徒会活動の意義は観念的には理解しているがそれを活発化する具体的な実践力に欠け、その方法が場あたりので一貫性持続性が足りない。「自主性」も已に反抗期を脱している筈の三年生で「教師との話し合い」にあまり関心を示さないという消極的傾向であらわれ、又生徒間の「話し合い」も「忠告・訴え」にまで行かない¹⁾。

つまり、生徒会に関する生徒たちの理解が観念的なものにとどまっており、生徒会を活発にするための話し合い活動などの実践についての意欲が低いという点を課題としてとらえている。

第79号で紹介したように、生徒会についての関心は、中学時代のほうがやや高かったという調査結果も出ていた。これについては、次のように説明する。

中学時代、教科学習で優秀な成績を上げながら、一方で生徒会の役員・委員をつとめ、同時にクラブ活動のリーダーシップを握る、というチャンピオンであった本校生徒の多くは、入学とともに「教師の助手」的な立場を失い、「良い子」の座から開放されるとともに、上級生の言動をみて「自主性」に眼覚め、より自主的に特別教育活動を考えるようになる。

而して、環境の変化に応ずる意識の切り換えが不十分のため、自己の位置の新しい定着が出来ず、新しい友達に支えられず、個別化する傾向も見られる²⁾。

かくて、中学で概して有能な団体運営の経験者であった生徒も、一たび「親切的」指導から抜け出ると、それに代るべき強靱な自主的な意欲を十分には持ち合わせぬため、戸惑うのである³⁾。

つまり、中学生のときは「教師の助手」的役割を与えられて生徒会の中心的役割を果たした生徒たちも、自主性を重視する深志高校に入学して「良い子」の立場から離れると、生徒会に関する意欲を失う生徒が見られると述べている。

部活動は代わりになるか

では、どうしたらよいというのだろうか。本書を執筆した教員は、「部にはHRでは得られぬ楽しさがある」「部は苦しいがその中に楽しさがある」反面「部はたのしくて HR なんか足下にも及ばない」(17頁～18頁)という意見があったことをとりあげ、部活動はホームルームや生徒会活動の代わりになるか、という点について考察している。

部活動は生徒をひきつける以下のような要素があると述べられている。

では、かくも生徒を惹きつける部生活には何があるか。生徒の拡散を規制して勢力を集中させる具体的な目標があり、縦・横にひろがりを持つ秩序と団結の醍醐味、その誇りに支えられた「兄弟のような交友関係」即ち家族性がある。彼等にとって、兎角学習上のコンプレックスの誘因になり易い先生を代償する先輩がある。これはまさに絶好の「みんなで生きている」単位を提供しているのだ⁴⁾。

部活動に上のような魅力があるため、生徒会は「兎角生徒会幹部に人が得られず、委員会は母胎から遊離した少数熱心な委員或は少数校友の発言の場と化して、生徒会活動への推進性を失っている⁵⁾」現状にあると述べている。

では、生徒が自主的に活発に部活動に取り組めば生徒の自主性は十分なのだろうか。これについては、本書は次のように指摘する。

われわれは部に属さない相当数の生徒の存在と、如上の部の美点たるものを見失って退嬰的な「寄り合い」の気分のみで満足し、部は HR の代りであると考え一方の趨勢を見つめなければならない⁶⁾。

つまり、部に所属しない生徒が相当数存在していることと、退嬰的な集まりだけで満足してしまう傾向があるため、部活動はホームルーム (HR) や生徒会の代替とはならないとしている。

ホームルームと部活動に支えられた生徒会

以上の考察をもとに本書の教職員は生徒会について以下のような方向を示している。

われわれは先ず HR に於いて団体的な活動を通して自主的な個性を伸張し、この線に於いて活発に之を指導しなければならない。就中、みんなに係わる生活の具体的問題を団体で解決して行く過程に於いて、廉直、建設的批判、寛容の諸徳を培わせ、HR を爽やかな愛情の行き交う楽しい場とし、こゝに誇りを持たせる方向を指向しなければならない⁷⁾。

さらに、HR を生徒会に活かし、又 HR 自体を閉鎖させないため、学年集会や縦割りの HR 集会が重要かつ有効であることを指摘するものである。

なお、之と共に、団体訓練に長ずる「部」を生徒会に生かし、諸行事、例えばトンボ祭(記念祭)などにその活動を総合して生徒会活動を活発にすることが大切である⁸⁾。

つまり、各ホームルーム担当教師の指導のもと、生徒たちがホームルームで自主的な集団活動を体験して問題解決能力や自主的な集団活動への意欲を高め、その意欲や力を生徒会の全校レベルでの自主的な集団活動に活かしていく。さらに、部活動を記念祭などの生徒会行事に結集させることで生徒の自主的な活動が全校で展開する、というようなホームルーム・生徒会活動・部活動の密接な関連づけが生まれることがゴールとされており、ホームルームが特別教育活動の要であると位置づけられているといえる。

本書では、調査だけでなく、ホームルーム、生徒会、部活動の計画や例も示されている。次号で紹介したい。

注

1) 松本深志高等学校『高等学校普通課程における教育課程の実験的研究』松本深志高等学校、1957年、17頁。

2) 同上。

3) 同上。

- 4) 同前掲書、18頁。
- 5) 同上。
- 6) 同上。
- 7) 同上。
- 8) 同上。

体験的文献紹介(32)

— 学会発表の開始と1970年代の教育史学界 —

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

東京文化短期大学の教授兼教務部長に就任して四年目の1973(昭和48)年、病身の学長は毎日、夫人の押す車椅子で登校して学長室に入り、奉伺する副学長と夫人が何やら談笑して終る毎日が続いた。定例の教授会は毎月開かれ、学長・副学長の開会の辞で開かれ毎回、教務部長、教務課長、学生課長の提案と若干の質問で進行した。大浜英子先生はすでに短大を去ったので私はこの短大を発展的に改革する気持ちがなくなり、すでに改革したカリキュラムに従って授業を進めた。体育実技を含めた各種の実習実技にも恒例化した各種の行事にも教授、助教授、助手、職員が慣れて機能的に事が運ばれた。学生募集法の改善、服装自由化が功を奏したのか、学生が急速に増加し、短大全体が明るく活発になったように感じた。

私はこの短大の改革にも運営にも意欲を失っていたので全力を教育史研究にかけるようになった。大枚をはたいて研究文献を買い求めたので教務部長室は大学の研究室のようになった。さし当って明治初期の東京の私立中学校と私立外国語学校を研究しようと決めた。

そのように決意が^{たか}昂ぶっていた頃、二つの依頼が舞い込んできた。一つは当東京文化学園五十年史編纂の件、一つは『城右学園四十八年史』編纂である。前者は私が本学に着任した年、十年後が創立50周年だから沿革史をつくるよう同窓会から要請があった。城右高等学校が創立者の河野通禰太先生が亡くなってから間もなく学校内紛争が起ったことは別稿で述べたが、やがて教員も生徒も四散して立ちゆかなくなった。1974(昭和49)年3月、最後の卒業式をすませて新宿にある文化女子大学の管理になり、4月から文化女子大学附属杉並高等学校になった。その時、河野先生の令夫人・十重子氏は城右学園の沿革史

を残したいと思ったのであろう。私を尋ねてそれを懇願した。これはお断りできない。快諾して、早速、河野十重子先生を含む同窓会員数人の編集委員会をつかった。一方、『東京文化学園五十年史』はまだ間があるので、二・三人の教員に資料の収集を依頼して時を稼いだ。

この頃、私は東京の私立中学校・私立外国語学校の教育史研究に熱中していた。この気持は抑え切れない。かつて大学院修了の頃、大和猿樂能の稽古法を中世芸能教育として教育学会で発表したが無視されて辱をかいだ苦い経験もある。近時の教育史学会の発表論文をみると近代学校史、とくに明治期の学校問題をテーマにするものが圧倒的に多い。私の目下の研究テーマも明治初期の私立学校である。よし、教育史学会で起死回生の研究発表をしようと決心し、1973(昭和48)年秋の第17回教育史学会(岡山大学)で「明治初期における東京府の私立外国語学校」を発表した。前述の『文部省年報』所収の「外国語学校表」を年代別、課題別に分析し、東京府の開学願書や学校沿革史とつき合わせて開学の意図や学科、生徒の実態等を明らかにしたものである。質問も多くこの発表は成功裏に終わった。司会は私がかねて尊敬する名古屋大学の仲新先生で的をしばった質問がでるよう誘導してくれたような気がした。この発表は当学会の紀要論文に採用された。『教育史学会紀要第17集・日本の教育史学』に「学制期における東京府の私立外国語学校 — その形態と継続状況についての一考察」として載っている。

十数年前、「中世能役者の稽古法」を日本教育学会その他の学会で発表したにもかかわらず、全く無視され続けた雪辱せつじよくを果したので以後、続けて教育史学会で研究発表するようになった。

1974(昭和49)年、専修大学で開かれた第18回教育史学会で「学制期における東京府の私立中学校」を発表した。『文部省年報』所収の「中学校表」を台本として東京府の開学願書、『日本教育史資料』収載の東京府下漢学塾等を突き合わせての調査であるが、本研究にはさらに明治10年から「中学校教則大綱」ができるまでの各府県がつくった教則表の経緯を加えた。学会発表当日、

てごた

手応えがあり、質問が相次いだ。司会は尊敬する日大の土屋忠雄先生で、司会席から「中学校教則大綱」は府県がつくった教則を参考にしてつくったことがわかった、という感想を述べられた。嬉しかった。

私が東京文化短大の教授になり、教育史学会に研究発表しはじめた1970年代は日本の教育史学が転換期を向かえた時期である。1968(昭和43)年が「明治百年」だと大騒ぎした余波で1972年を「学制」公布100年記念として『教育百年史』をつくろうとする声が高まった。1922(大正11)年に、文部省が『学制五十年史』をつくっているし、同じ年、民友社が『教育五十年史』を公刊している。1970年はその直前に東大・日大の大紛争が起り、69年には東大安田講堂で学生と警官隊の衝突があった。また高校紛争が全国的に拡がり66年には「後期中等教育の拡充整備」に関する答申がでるなど、高等学校と大学について政府と社会に関心が高まった。その背景には高度経済成長と進学率の急上昇がある。こうした状況が明治維新以来の教育史を再検討しようという教育百年史編纂の気運をつくったのだと思う。1972年、文部省の『学制百年史』が公刊された。『学制七十年史』『同八十年史』の伝統を引いているが、編集に斬新さがある。75年には国立教育研究所が『日本近代教育百年史』全10巻を刊行した。64年に開始、10年がかりの大事業で日本教育史学界が総力をあげたモノグラフと言えよう。また学制百年の掛け声に触発されたのか、70年代に「府県教育百年史」が続出した。中でも『長野県教育史』全9巻、『同史料編』全3巻、『同教育課程編』全2巻はユニークである。さらに各府県が近代百年史を目処に教育史を叙述している中で、東京都と京都府が『東京都教育史資料体系』『京都府百年の資料・第5編教育』を編纂した。一つの見識であろう。府県教育史ではこの外にもユニークなものがあるが、ここでは述べきれない。

各地の府県教育史の編纂・執筆には東京はじめ各地の日本教育史研究者が参画したので75年、秋田大学での教育史学会は「地方教育史の研究」がシムポジウムの課題となって論争が繰り広げられた。長野県教育史の編集者、中村

一雄氏と東海地方の小学校普及状態を在地の資料で調べあげた『明治初期の教育政策と地方への定着』の著者・仲新氏の意見主張が鮮明に遺る。

当時はまた一定時期に起った社会運動や変動を教育史と結びつける研究が興った。72年の教育史学会(京都大学)での東京大学教授と大学院学生の協同研究「自由民権運動と教育」がその代表である。これは若手研究者にインパクトを与え、以後、明治10年代の地方教育史を題材に取る場合、自由民権運動は看過できないようなムードを作った。一方で従来^{のこ}の個人研究発表から数人組んだ協同研究発表が教育史学会に色取りを添えるようになる。これがさらに大きくなり、日本教育史学界の下部組織のような〇〇教育史研究会がやがて続出するがその典型は78年に発足した地方教育史研究会(会長仲新)であろう。今日まで全国地方教育史学会として活動を続けている。

戦後、活発になった日本教育史研究の対象時期は主に近世と明治時代であった。徐々に大正・昭和戦前期、やがて戦後の教育に及ぶようになったが1969年、戦後教育全般を通史的にみた仲新著『日本現代教育史』(第一法規・教育学叢書1)が公刊された。次いで69年から76年にかけて海後宗臣編『戦後日本の教育改革』全10巻が東京大学出版会から逐次公刊された。各巻は教育改革、教育理念、教育行政、教育財政、学校制度、教育課程総論、教育課程各論、教員養成、大学教育、社会教育からなり、海後宗臣監修のもと、海後門下の俊秀が分担執筆している。近代教育史は勿論、現代教育学にも通暁しなければできない業績である。なおこの間の1971年、海後宗臣の還暦記念事業として東大の門下生による『日本近代教育史事典』(平凡社)が公刊された。画期的なことである。

70年代の教育史学界の研究発表をみると近代日本教育史の増加が著しいが、それと並んで西洋教育史研究も盛んであった。1976年から教育史学会第3代会長・梅根悟監修による『世界教育史大系』全40巻の刊行がはじまった。第1～第3巻・日本教育史、第4巻・中国教育史、第5巻・朝鮮教育史、第6巻・東南アジア教育史であるが第7巻から20巻までは西洋各国の教育史で、21・22

巻・幼児教育史、23巻初等教育史、24・25巻・中等教育史、26・27巻・大学史、28巻・義務教育史、29巻・教育財政史、30巻・教員史、31巻・体育史、32巻・技術教育史、33巻・障害児教育史、34巻・女子教育史、35巻・農民教育史、36・37巻・社会教育史、38・39巻・道徳教育史、40巻・世界教育史事典となっている。いずれも西洋教育史が基軸になっている。執筆者は梅根悟門下の東京教育大学系の研究者が主流になっている。このように大規模重厚な教育史編纂は2021年という現時点に立つとまさに空前絶後のことで1970年代の教育史研究者の層の厚さが感じられる。1970年代は戦後教育史を指導した学者のしめくりで、その門下生が最も活躍できた時期ではなかったかと思う。そしてこの気運の中から新しいテーマ、新しい方法を目ざす次世代の教育史研究が芽生えはじめたと思われる。

参考文献 『教育史学会紀要・日本の教育史学』第13～第20集（1970～1977年）

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

本年11月下旬、ミャンマー産の琥珀の研究上の取扱い等について厳しく問題視する…ニュース記事(朝日新聞社など)がネットで公表されていました。これまでもミャンマー産の琥珀には、恐竜が生きていた白亜紀の貴重な化石が次々と発見されており、その研究知見の蓄積は、まさに自然科学史研究の一大画期といえる状況でした。たとえば2016年には、ミャンマー産の琥珀のなかから白亜紀の羽毛恐竜の尻尾がみつき、当時の羽毛の状態まで十分に解明できるのは世界初だと、社会的な注目を大きく浴びました。しかし、当のミャンマー内では軍事衝突がなおも続き、2017年からはミャンマーの中央政府軍が恐竜琥珀の発掘地帯を制圧・掌握してしまい、米科学雑誌のScienceでも、中国などの古生物学者らが研究目的で琥珀を高値で購入し国外へ持ち出し、その資金が軍事政権側へと流れていると、批判を表明しています。2020年には、米のニューヨーク・タイムズでも、ミャンマー産琥珀の売買がミャンマーでの暴力や治安を悪化させる、主な資金源となっている…という懸念を示しています。このような世界的な声を受けてか、大英自然史博物館による古生物学の専門誌ジャーナル・オブ・システムティック・パレオントロジーなどでも、2020年から、ミャンマー産琥珀を使った論文を掲載しない方針を明らかにしています。研究上の倫理という問題は、いくら素晴らしい当該の研究成果が飛躍的に望まれると分かっている、紛争のアジア地域だけでなく、世界全体における関係している研究者自身に、今まさに熟慮と自制が厳しくもとめられているのかもしれない。(谷本)

本ニューズレター第81号の八田友和会員の「学校資料の教材化を模索して② ―学校は必要?それとも不必要?―」はとても興味深かった。学校教育法第一条で定義された学校以外の学びへの国の責務について言及した2017年の「教育機会確保法」やコロナ禍でのオンライン授業といった状況を背景に、「学校は必要?それとも不必要?」というテーマについて、生徒同士で意見交換をしながら小論文を執筆するという授業プランである。「学校は必要?」というテーマは、教育学上の大問題であり、私なら「十分に考え抜き、準備を万全にしてからいつか授業で扱おうか」と構えてしまいがちだが、八田氏の授業モデルを見ると、「なるほど。これならやれるかもしれない」という気持が生まれてきた。教育史の研究者としては、生徒自身が調べながら考えるといったスタイルであっても、教育史の有名・無名な資料を積極的に紹介したいという思いもあるが、「構えすぎずに始めてみる」ことも大切であることに気づかされた。(富岡)

会員消息

11月下旬に、関東教育学会第69回大会（Zoom）にて、吉岡三重子さん（社会情報大学院大学）の「戦後一般教育の導入による大学教育の実際」を拝聴いたしました。とくに吉岡さんは、戦後の一橋大学の事例を取り上げて考察しようと試みていて、たいへん関心をもちました。ただ残念ながら、当日の発表では時間の制約などもあって、戦後の一橋大学で一般教育を担当したとされる教員については、次のような言及にとどまってしまう、正直、期待した聴講者としては肝心な点で消化不良の印象でした。今回、『小平学報』の分析を主に行った吉岡さんによると、戦後の一橋では「一般教育を担当する教員に関する所属や待遇、授業負担等の問題点が指摘されていた。ただし、旧制高等学校や大学予科の教員が、そのまま新制大学の一般教育担当教員になっていることへの差別的な待遇問題は指摘されていたが、教育内容がどのように異なるのか具体的には示されていなかった」といいます。私がとくに知りたかった点は、大学予科で担当していた教員らが、戦後の新制大学で「一般教育」をどのような思いを抱きながら、実際に学生らに授業を行ったのか・・・ということです。次回また機会があれば、吉岡さんの研究発表（続報）をうかがってみたいと考えています。（谷本）

1月27日・28日に日本生涯教育学会第42回大会に参加してきました。東北学院大学ホーイ記念館を会場に、対面とオンラインを併用した学会大会が開かれました。八田は、会場の東北学院大学にてポスター発表および口頭発表を行い、多くの先生方から貴重なご意見・ご感想をいただきました。お世話になりました先生方、この場を借りて御礼申し上げます。次年度は、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターで実施される予定です。多くの先生方にお目にかかれたいことを楽しみにしております。（八田）

コラムにも書きましたが、高校で非常勤をしています。ここ数ヶ月は感染状況も改善しているので、行事なども問題なく実施できているようで生徒たちも比較的のびのびと学校生活をおくれているようです。ただし、全体としては規制も多く、やはりコロナ前とは異質の学校生活、という感じです。授業では自由にやっていいとのことだったのでかなり時間をかけて第二次世界大戦までの道程を扱いました。第二次世界大戦を支えた総動員体制などを説明する際に、近年の時代状況を例示すればすんなり説明できてしまうことに毎回モヤモヤしています。考査やいくつかの機会に生徒にコメントをもらおうと、変わらないなあと思う箇所もあり、あるいはへえ!と驚くこともあります。年明けからは戦後史を扱います。ここ数年盛り上がりを見せるBLMなどについて書いてくれる生徒も多く、そのあたりにも重点を

置きながらやろうかな、などと漠然と考えています。とはいえ教科書的に公民権運動を教えてもつまらない、という欲もあり、読まなくてはならない本が山積しています。総じて教育学を修める身として勉強になることばかりなのですが、授業準備ばかりで研究とのバランスが若干崩れているようにも感じます。どこかで巻き戻さなければ、と思っている内に年の瀬となってしまいました。皆さま、良いお年をお迎えください。(猪股)

本年度は、業務の忙しさを言い訳にして(甘えて…)、研究が進みませんでした。来年度は、レターの執筆を強く決意しております。ところで、現在、本学(3年制の短期大学)は、4年制大学になるための準備をしております。私もそのお手伝いをしております。大学の設置において、「こういうことも考えなければならないのか」など、戦前の大学史を研究している者には、新鮮な経験がいろいろ出来ます。大学令の時、ある私学では、学生たちが、大学「昇格」を要求して血判状を提出したようです。私も「私立大学撲滅」にならないように頑張ります。(山本剛)

授業でも、研究でも、「振り返り」がアイデアのもとになることを、関西教育学会(2021年11月15日~21日、web開催)のシンポジウム「今、教師の養成・研修に求められること 省察する力・つなぐ力」の動画を視聴して改めて感じました。村井尚子氏(京都女子大学)が、「コルトハーヘンの8つの窓」を使って、教育者と子どもの行為を省察(何をしたか、そのとき何を考えていたか、どう感じたか、本当は何をしたかったか)する方法を紹介し、「この行為自体にどういう意味があったのか」という本質的な振り返りをする必要性を指摘していたのが、特に印象に残りました。

ただし、シンポジウムを視聴したときのメモをパソコンにわざわざ入力していたのですが、この「消息」に書こうと思って探しても、保存に失敗したのか見つかりませんでした。まあ、やはりそんなこともありますね。調べ直してある程度思い出しましたし、ここに書いてアウトプットしたので、記憶に残るだろうと思います。今後も本ニューズレターの「短評・文献紹介」を振り返りに活用していきたいと思います。

なお、2年前の松本の旧制高等学校記念館・夏期教育セミナーで辻邦生についての発表をしてくださった学習院大学史料館の富田氏から、「朗読会・声でつむぐ辻文学」第6回の案内をいただきましたので、次頁に紹介します。

2022年3月までYouTubeで視聴できるようです。詳細は以下をご覧ください。


https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/notice/notice_211116.html

ご興味のある方はぜひ。(富岡)

朗読会
《声でつむぐ辻文学》

第6回

〔著〕辻邦生



令和3年(2021)11月上旬より
翌3月末日まで配信予定

〔主催〕学習院大学史料館
〔共催〕NPO法人ことばのひろば五億の鈴の音

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5サイズの小冊子ができます。